

映画館が苦手な理由

勇気を出して映画館に行った。と書くと大げさなようだが、事実である。映画作品についてはこのコラムで何度も扱ってきたとおり、好きでよく観ている。ただしTSUTAYAをフル活用し「自宅劇場」で。

映画館のザワザワ感や物音、ポップコーンの匂いなどに集中力を削がれるのがイヤなのだ。そもそも映画の音量そのものが私には大きすぎるので、いつも耳栓で調節しながら鑑賞している。

今回、上映館で観ようと思ったのは『君の名は。』。これが過去の新海誠作品に親しんでいる者としては首をかしげざるを得ないほどの大ヒット作になったと知って。

『秒速5センチメートル』にしろ『雲のむこう、約束の場所』にしろ、一種のオタク映画としては評価できるのだが、興行収入200億円突破とは、監督には失礼ながら摩訶不思議。これは劇場に足を運び自分の目で確認しなければならない。そう思いつづるずる延びて3月、封切りから半年以上も経ってから出かけた。この時期の平日なら観客も少ないだろうと踏んで。

ところが——。と書けば、読者の方々にもおおよそ察しがつくだろう。

観客はそれほど多くなかったのだが、若いカップルがやけに目についた。外はまだ寒くても、大学は超大型連休の春休みなのだ。しかも大半はリピーターらしく、「次のシーンで驚かされるんだよな」「私はあそこ嫌い」などの声が耳栓越しに聞こえてくる。後ろの席は老夫婦だったが、どういうわけか場面とは関係なく、ひっきりなしに笑い声をあげていた。

結局、何を観たのかわからないような状態で映画館を後にした。

人事コンサルタント 本田 有明

フードコートで特訓中！

若いころは耳栓など使わずに映画を楽しんだものだ。どうしてこれほど神経質になったのかと考えてみたところ、すぐに答えが出た。会社勤めを辞めて以来、職場のにぎわいから遠ざかったのが大きいのではないかと。

電話のやりとりやキーボードをたたく音（そして上司の怒鳴り声）など、職場は喧騒に満ちている。そんな中で仕事をしていると、人は良い意味で鈍感力が身につく。私にしてもそうだっただろう。

それが独立してからというもの、その種のにぎわいから解放された。打ち合わせや講演、研修などで人と接することは日常茶飯だが、そこに無秩序なうるささはない。執筆は事務所か自宅の書斎なので、自然と身体が静けさになじむ。

そんな生活を長く続けるうち、いつの間にか人込みや喧騒に弱くなってしまったようだ。

これはいけないと自覚して鍛錬を始めることにした。ターミナル駅付近の施設によくフードコートを見かけるが、折があればそういうところで食事をとることにした。

ご存じのとおりフードコートには種々の食べ物屋が並び、時間を問わず多くの客で混雑する。赤ん坊の泣き声や子どもたちの足音、学生の笑い声のはじめ、食事中に背後からぶつかられたりすることも珍しくない。人込みや喧騒に慣れるには打ってつけの場所といえるだろう。ラーメン、韓国料理、ハンバーグ、カレー、たこ焼き。片っぱしから食べながら、これも鍛錬とがんばっている。

きちんと成果を確認できる日がきたら、このコラムでご報告しよう。